



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3718 号 2017.6.15 発行

### 児童精神科医が見た「愛が足りない子」の実情



働かなければいい、ひとり親で育てられなければ離婚しなければいい、そもそも子どもを持たなければいい。そう考える人だっているかもしれない。けれども、人生はそう設計どおりに進まない。そこで生じる困難を「自己責任」とし、手を貸さない社会で生きるのは楽だろうか。

家族をより風通しの良い場所に変えていくことは、多くの人の可能性を広げることにもつながるだろう。

そこでこの連載では、変化した家族の実態に合わせて、家族の担う役割をより外部化、軽量化できないか、もしくは逆に、家族という共同体をより拡大できないかといったテーマのもと、専門家の方にお話を伺っていく。

初回の今回、お話を伺うのは、児童精神科医であり子どもの学習支援や、10代ママの子育て支援などを行う NPO 法人 PIECES 代表の小澤いぶきさん。虐待や、児童養護施設の子どもたちなどさまざまなケースに接してこられました。

### 愛を家族の重荷に しないために 何ができるのか

紫原明子

#### 「愛情」が何かわからずに皆悩んでいる

紫原明子さんによる新連載、1回目です

**紫原 明子 (以下、紫原) :** 小澤さんにお話を伺いたいと思ったのは、私自身も、また周りの親達を見ても、親として子どもにどの程度愛情を注げば安心していいのか、その適量がわからずに苦悩することが多いと感じたからです。

私のある友人はフルタイムで働くワーキングマザーで、共働きなので収入もしっかりあります。それでも、シッターさんを雇ったりはせず、忙しい仕事が終わると毎日必ず手の込んだ料理を作り、子どもに食べさせ、ひととおりの家事を終えた後で、残った仕事を片付けています。私は彼女ほどストイックにやれないけれど、肉体的な負担を押してまで彼女がそうする気持ちは、わからないではないんです。

**小澤 いぶき (以下、小澤) :** というത്？

**紫原 :** 子どもに最大限手をかけなければ、愛情が十分に伝わらないんじゃないかという思

いを、多くの親、特に働く親が抱えていると思うんです。愛情＝時間ではないと頭では思いつつ、私の母親はある時期まで専業主婦だったので、よくおやつまで手作りのものを食べさせてくれました。今、母となった自分がわが子に同じことができていないので、どうしても不安に思ってしまう。

また、うちは一人親家庭なので余計に、何か子どもに問題が起きれば「愛情不足」が原因だと言われてしまう気がします。そもそも、みんなが漠然と「愛情」と言うものって、実際のところ何なんですか。



**「愛情機能」だけは、外部に委託できない**

愛着とは特定の人との間に築かれる情緒的な結びつきのことを言います  
(撮影：梅谷秀司)

小澤：そうですね、愛情とは何か、難しいですね。1900年代、アメリカのオグバーンという社会学者が、家族機能を7つに分類したのですが、「経済機能」や「教育機能」、「保護機能」といったものと並べて「愛情機能」を挙げています。

オグバーン説で興味深いのは、「愛情機能」以外の6つの機能は、基本的に家族の外に委託することが可能であるとするのに対し、唯一「愛情機能」だけは、外部に委託できないと言っている点です。

紫原：つまり、愛情は親しか注げない、ということでしょうか？

小澤：いえ、そうではないんです。愛情は親でなくても注げますし、発達心理学的に重要だといわれている愛着も、親でなく

ても、「特定の人」との関係の中でも育まれるといわれています。愛着とは、イギリスの精神科医、ボウルビィの愛着理論で提唱している概念の1つで、人間だと乳幼児期に、養育にかかわる特定の人との間に築かれる情緒的な結びつきのことを言います。

紫原：具体的に、どういったかわりがあればいいのでしょうか？

小澤：まずは、乳児期の子どもが刺激に対して反応したり、泣いたりほほ笑んだりしたときに、特定の養育にかかわる人が、関心を持って反応を返したり、安心感を与えたり、ケアすることが大切だと言われています。

たとえば、おぎゃーっと泣いたら、よしよしと癒やしてもらえるようなことですね。そして、大切なのは、これが特定の人との間で交わされることです。

紫原：特定の人ですか？

小澤：ええ。2000年にルーマニアで、ブカレスト初期養育プロジェクトという興味深い研究が行われました。生まれた直後から一定期間を乳児院で育つ子、乳児院から里親のもとに移って育つ子、乳児院に入ったことのない、一般家庭で育つ子、それぞれの発達を調べ



たんですね。すると、乳児院で育った子どもは、里親の家庭や一般家庭で育った子どもに比べて、愛着形成に課題があることがわかりました。もちろん、虐待やネグレクトが日常的に起きている家庭よりは、施設や乳児院で育ったほうが良いのですが、血縁でなくても、特定の人との関係をつくれる環境が理想だと感じます。

紫原：だとすると、赤ちゃんのうちから保育園に預けるのはよくないのでしょうか？

小澤：そんなことはありません。先ほどの愛着形成ができていくことがとても大事で、そうすると、子どもは、愛着対象から大切にされているということが、心の中に内在化してくるんですね。なので、保育園に行っても、帰ったらちゃんとその人がいることが想像できるし、安心できます。

乳幼児期に愛着形成がなされないと、どんなことが起きるのでしょうか

(撮影：梅谷秀司)

### 愛着形成がなされないと起こること

紫原：なるほど。では、乳幼児期に愛着形成がなされないと、どんなことが起きるのでしょうか？

小澤：人と関係をつくっていくのが難しくなることがあります。人とかかわりを過度に警戒したり、逆に距離が近くなりすぎたりと、特定の人との親密な関係を築くことが難しくなるといわれています。また、人とかかわりがうまくいかない中、何度も傷つき生活に困難を抱えたり、たとえば学習などへの意欲が奪われていることもあります。

紫原：え、それはどうしてですか？

小澤：これは福井大学の先生方の研究によって明らかになりました。学習意欲など、意欲にかかわる、脳の部分と、愛着形成とは深く関係しているそうなんです。(参照)

紫原：そうなんですか！もしそういった症状が見られた場合、どういう対応が必要なんでしょう。

小澤：まずは医療や専門機関で、虐待などでできたその子のトラウマを治療していくこと。また、子供にかかわる人も、トラウマによる影響を熟知して子どもにかかわること。そこから、特定の人との信頼関係をきちんと築いて、子どもが自分や他者を信頼できるような環境をつくるのが大切なのではないかと思います。

自分や他者への信頼感が生まれ、誰かに頼れるようになると、その子の生きづらさが少しずつ変化していきます。実際、私は養護施設で虐待やネグレクトの中にいた子どもたちと長く接したこともあります。日常的に虐待されるような環境から離れて、トラウマがケアされ、人との信頼関係ができて、何かあっても大丈夫だ、と安心できる中にと、最初は誰にも頼れなかった子どもが、しだいに誰かに頼れるようになったり、物事へ取り組む意欲が取り戻されていくように感じました。

### 親子を孤立させない仕組み

紫原：愛着形成って重要なんですね。ただ、自分のかつての子育てを振り返ってみると、泣いているわが子に必ずしも優しい言葉をかけてあげられないときもありました。公共の場所だと「早く泣きやませなきゃ」と焦ったり、疲れていると「私だって泣きたいよ」なんて思ったり。

小澤：そうなんです。子どもの感情を大人が受け止めるためには、ある程度養育する側に余裕がないと難しいんです。

たとえば、外で子どもがちょっと泣いたときに、周りの人がすぐに「うるさい」って言う環境だと、親も子どもを「泣きやみなさい！」って黙らせざるをえないですよね。親がどういう行動をとれるかって、社会の価値観とか情勢、あるいは本人の育ってきた環境に、大きく左右されると思うんです。他人に迷惑をかけてはいけません、と言われて育つと、それが当たり前だと思って大人になりますからね。

今の日本の社会では、何か事件が起きると簡単に親を責めますし、育て方が悪いなんて言う人もいます。でも、そのお父さん、お母さんを導いている一因は社会にあるという意識を持っている人は少ないように思います。

紫原：それって日本に顕著な傾向なんでしょうか。海外ではどうなんでしょう？

小澤：私は以前、研修でカナダのオンタリオ州にあるトロントという都市に滞在していたんですが、そこではまさに包摂を社会でつくっていかう、という取り組みをやっています。妊娠するとまず「Nobody's Perfect」(完璧な人なんていない)というタイトルの冊子が配られるんです。親って初めから親なわけじゃないので、あなたは完璧じゃなくていい、こういうときには助けを求めていいんだよ、子どもはみんな育てましょう、ということが書いてあるんです。

紫原：これから出産しようというときに読むととても勇気づけられますね！

小澤：そうなんです。子育ての具体的なレクチャーが受けられるプログラムも充実していますし、出産後に気軽に子育て相談に行ける、ファミリー・リソース・センターという施

設も用意されています。

それから、フィンランドには有名なネルボラという制度もありますね。通称“ネルボラおばさん”といわれる人が、妊娠期間中から担当としてついてくれて、頻りに訪問してくれるんです。ネルボラおばさんは、妊娠中の悩みから出産、産後の子育て、経済事情まで、何か困ったことがあればすべての窓口となってくれます。

紫原：それいいですね。考えてみると、出産してからはとにかくわからないことだらけですよ。でも、親となった以上、「わからない」「できない」は許されないんじゃないかという思いが漠然とあって、わからないことを誰かに聞くにも勇気がいる。その点、生まれる前から信頼関係が築けていると相談しやすいですね。

#### 大人にも特定の他者との信頼関係が必要

小澤：ええ。担当が変わらないということがすごく大事で。日本でもこういったワンストップを実現しようとしている自治体もありますが、基本的には行政には異動があるので、担当が変わってしまうことが多いです。でも、毎回初対面の人に1から話すのは大変だったりしますよね。子どもの成長に必要なのと同じように、私たち大人にも特定の他者との信頼できる関係が必要ではないかと思うんです。

紫原：とはいえ日本だと、子育てのノウハウは基本的には親子間で受け継がれるべきもの、という意識が強いような気がします。家族の中で完結させなければいけない、と。でも、現実には近すぎる関係だからこそ余計にストレスになることもあるんですよ。

小澤：もしくは、遠くに住んでいて親を頼れない、なんていう場合もありますしね。核家族化が進んで、利害関係なく親子を見守り、子どもの成長を促していけるような人が少なくなっていると思います。

子どもの成長に特定の大人との愛着形成が必要だから、養育者がより余裕を持って子育てできる環境を外側からサポートする。家族の外側から、家族を包摂する仕組みを作ることが大切だと思うんです。

(後編に続く)

### 愛犬用クッキー 好評 前年同期比、売り上げが倍増 世田谷・障害者施設、厳しい品質 モットー /東京

毎日新聞 2017年6月15日

世田谷区の障害者施設「泉の家」が作るクッキーが評判だ。ただし、クッキーといっても食べるのは愛犬。都内の障害者施設で犬用のクッキーを作っているのはここだけという。多くの人に関心を持ってもらおうと、春にクッキーを犬の形などに変えたところ、売り上げが前年同期比で約2倍に伸びた。保坂俊晴施設長(58)は「品質を厳しく保ち、施設利用者が主体となって作っている」と話す。【谷本仁美】

チーズ味、パンプキン味、さつまいも味と、アレルギー対応のビーフレバー味の4種類があり、1袋(20グラム)150~200円で施設などで販売している。人が食べるクッキーと同じ食材を使い、添加物や油分、砂糖を加えない健康志向。つなぎがないので歯ごたえがあり、少量でも満足感があるため減量中の愛犬にも良さそうだ。一口食べてみた。表面がパリッとしたクラッカーのようで、かむほどに素朴な甘みを感じる。

犬用のクッキーを作り始めたのは2010年の施設改築がきっかけという。「地域に開かれた施設」を目指し、1階にカフェを設けた際、閑静な住宅街にあることから、愛犬を連れた人にも利用してもらおうと考えた。そこで「他の施設にはない、自分たちの商品を作ろう」と犬用のクッキー作りに着手した。

「泉の家」でボランティア活動をする地域の主婦たちも、その取り組みを支えた。クッキーが完成すると、ふだん利用しているトリミングサロンや動物病院へ持ち込み、宣伝してくれたという。

#### 獣医師がアドバイス

クッキー作りでは獣医師のアドバイスもあった。同じ種類のドッグフードを食べ続ける



ことでアレルギーを持つ犬が増えていると知らされ、小麦やとうもろこし、鶏肉など8種類のアレルギーを使わないクッキーを求められた。

しかし、限られた材料でのクッキー作りは難しい。煮干しや高野豆腐などを試すと、犬にそっぽを向かれたという。支援課長補佐の石黒玲奈さん（36）は「10回くらい失敗して、心が折れそうだった」と振り返る。

お菓子作りの得意な施設ボランティアの助言を受け、試行錯誤すること半年。タピオカ粉を使ったアレルギー対応のビーフレバー味が誕生した。犬のしつけには少量で複数回与えた方がよいという獣医師のアドバイスもあり、ビーフレバー味は細長く成形して、表面に切り込みを入れてちぎりやすくした。今では一番の人気商品だ。

また、クッキー作りに携わる施設利用者の特性は一人一人異なるため、作業が効率良く進むよう、利用者自ら自助具になりそうな物を探したり、商品改良でも職員と積極的に意見を交わしたりしたという。

支援員の奥田昌規さん（29）は「クッキーは施設利用者の努力とアイデアの結実」と話し、クッキー作りに約4年間参加している山田孝さん（72）も「きれいに型が抜ける時が面白い。お客さんに喜んでもらえたらうれしい」と笑顔で話した。

施設のカフェで販売しているほか、動物病院や犬のしつけ教室などに納品している。手作りのため大量生産は難しいが、保坂施設長は「地域のボランティアの方の協力がある商品。販路を拡大したい」と意欲をみせている。問い合わせは泉の家（03・3417・3451）。

#### 県庁で「やまゆり園」再生部会 検討結果は8月上旬に 東京新聞 2017年6月15日

昨年七月に殺傷事件が起きた県立知的障害者施設「津久井やまゆり園」（相模原市緑区）の「園再生基本構想策定に関する部会」（部会長・堀江まゆみ白梅学園大教授）の第九回会合が十四日、県庁で開かれた。今後、三回の会合を開き、八月上旬に検討結果をまとめる方針だ。

部会は当初、六月に検討結果を取りまとめて県に提出する予定だったが、入所者の意向確認や地域生活へ移行する仕組み作りなどの集約で難航。会合後、取材に応じた堀江部会長は「施設の規模や、他の地域での施設建設なども検討結果に盛り込みたい」との見通しを示した。

この日の会合では、「意思決定支援」「生活支援」「生活移行支援」の三つの分野で、これまでの議論の方向性を確認。委員から「従来の施設をそのまま建てるより、少人数の施設が適切」「地域生活に移行した人を支援する体制も必要」などの意見が出た。施設を巡り、入所者の家族らは「元の園に戻してほしい」と、小規模施設への変更を念頭に置く部会審議に反発。堀江部会長はこうした意向に沿うかは明言せず、「家族の考えも揺らぐ。納得してもらおう形で県が説明すると思う」と話した。（布施谷航）

#### イチから分かる！ 神戸で24時間母子面談計画 神戸市北区の助産院に面談型の相談窓口設置を決めたNPO法人の理事会＝京都市左京区

望まない妊娠や、産んだものの「育てられない」と悩む母親が、子どもとともに24時間駆け込める相談窓口を設置する計画が、神戸市北区の助産院で進んでいます。当初は匿名で子どもを預かる「赤ちゃんポスト」の開設を目指していました。母と子を取り巻く環境はどうなっているのでしょうか？（中島摩子）

－計画中の相談窓口って？

「助産師が24時間態勢で母子や妊婦と面談する計画で、本年度中の開設を目指してい

神戸新聞 2017年6月15日



ます。助産院の通常の入り口とは別のドアを設け、目立たずに訪問できるようにするそうです。熊本市の慈恵病院で全国初の赤ちゃんポストを創設した蓮田太二理事長が顧問を務めるNPO法人『このとりのゆりかご in 関西』（大阪府箕面市）が今月、理事会で決めました。電話相談にも応じる予定です」

ー赤ちゃんポストとは？

「親が育てられない赤ちゃんを匿名で預かる取り組みで、今年5月に開設10年を迎えました。病院の一角にある保育器に赤ちゃんが置かれると、ブザーが鳴り、スタッフが駆け付けて保護します。生活困窮や未婚などを理由に、10年で130人が預けられました。母親は10～40代といい、近畿からも10人が預けられたことが分かっています」

ー神戸の助産院では、なぜ見送りになったのですか？

「慈恵病院では、医療的な助けが必要な状態で預けられた子どももいました。神戸市は『子どもの健康状態は医師しか判断できない』として、赤ちゃんポストの設置には医師の24時間常駐を求めました。NPO法人は現状では困難と判断し、助産師が24時間寄り添う面談型に変えました。児童相談所や特別養子縁組をあっせんする民間団体などとの連携も模索しています」

ーなぜ、支援が必要？

「若年で性知識が乏しいまま妊娠したり、貧困などで子育ての先行きに悩んだりする女性がいます。その結果、新生児の遺棄や虐待を招く場合もあり、厚生労働省によると2003年から約12年間で、虐待で亡くなった0歳児は283人＝表。人工妊娠中絶が全国で年間約17万6千件（15年度）という報告もあります。全国の児童相談所が対応した児童虐待相談件数も15年度に約10万3千件で過去最多となっています」

ー今、相談先はありますか？

「兵庫県と神戸市が電話とメールの相談『思いがけない妊娠SOS』を行い、16年度は延べ345件の相談がありました。慈恵病院の妊娠相談には昨年度、全国から過去最多の6565件が寄せられました。性暴力などに苦しみ、世間に知られたくないと思う女性もいます。妊娠中、一度も病院を受診しないまま自宅で産気づき、『人に知られるぐらいなら死ぬ』と訴えた女性もいたそうです。支援は待ったなしです」

■虐待で死亡した0歳児の人数  
(心中を除く)

期間	人数
2003年 7～12月	11人
2004年	23人
2005年	20人
2006年	20人
2007年 1月～08年3月	37人
2008年度	39人
2009年度	20人
2010年度	23人
2011年度	25人
2012年度	22人
2013年度	16人
2014年度	27人
合計	283人

※厚生労働省まとめ

精神疾患患者支える 但馬でピアサポーター広がる 神戸新聞 2017年6月15日

長期入院を経て、地域での生活を始めた男性患者を支えるピアサポーターたち＝豊岡市戸牧



医療上の必要性は低くても、地域に受け皿がないため、長期入院を余儀なくされがちな精神疾患患者。兵庫県の但馬地域で、そんな患者の退院や地域での暮らしを支える取り組みが進む。10年、20年と長く病院で暮らす患者も多いが、但馬では2014年からの3年間で、28人が病院外での生活を始められた。要となっているのが、自らの闘病体験を基に患者を支える「ピアサポーター」の存在だという。

(阿部江利)

豊岡健康福祉事務所などによると、但馬地域では現在、15人程度のピアサポーターが活動し、患者らの社会復帰を支えている。

精神疾患患者が、生活の場を病院から地域に移す「地域移行」の取り組みは、全国的に

遅れている。退院後、必要な医療や福祉サービスを受ける仕組みはあるものの、患者らが退院後の生活に不安を感じることが、大きな理由となっているという。

そうした現状を踏まえ、豊岡健康福祉事務所などは14年度から、生活支援センターほおずき（豊岡市戸牧）など2施設と協力し、希望者を募り、講座を開いてピアサポーターの養成を始めた。

但馬地域には1年以上入院する患者が300人以上（17年1月時点）いるが、14年度には1人、15年度には13人、16年度には14人が退院できた。うち19人にピアサポーターが何らかの形で関わっている。

患者の相談に乗って不安を取り除くほか、家探しや日用品の買い出し、通院の付き添いなども行う。支援した時間に応じ、賃金を受け取れる。

同事務所の柳尚夫所長は「長期入院で患者自身が退院への希望を失ってしまうケースも多いが、同じ経験をしたピアサポーターが身近にいれば、患者も前向きになれる。逆にピアの人も、つらい経験があるから人を支えられる、と生きがいを感じているようだ」と話している。

2014年に「ほおずき」所属のピアサポーターとなった上垣多美子さん（60）は、30代の時に統合失調症を発症。幻聴が聞こえ始めて病状は急激に悪化した。家事もできない状況になったというが、今は治療や投薬で改善したという。

これまでに患者8人と関わった。地域で生活を始めた男性の通院に付き添った際には、何気ない医師の言葉に傷ついた男性が、自信を無くして泣き出してしまったという。後で上垣さんが「あんな言い方はなかったよね」と慰めると、男性の気持ちが落ち着いたという。

「どこまで相手を思えるか、試行錯誤の日々。でも、関わる人が元気になる姿を見られたりもする。支援を始めて以来、毎日が楽しい」。

女手一つで幼子3人を育てる不安から、うつ病を発症した同市の今井綾子さん（55）は、15年からピアサポーターに。今では、服薬への不安や副作用のつらさを訴える患者にも共感し、声掛けができる。「どん底の状態を経験し、いろいろな人に助けられて今の自分がある。いつか自分も支える側になりたいと勉強を続けている」と話す。

■ピアサポーター 精神的な病気や障害を、自らも経験した仲間（ピア）として、対等な関係で患者の退院や地域での生活を支える支援者のこと。退院したいと考える患者の相談に乗ったり、情報を伝えたりするほか、通院や退院に必要な準備なども手伝う。養成講座を受講し、面接を受けて保健所や相談支援事業所などで働くケースが多い。

## 法人新設482社と微増 福祉の社団法人急増 2 016年県内

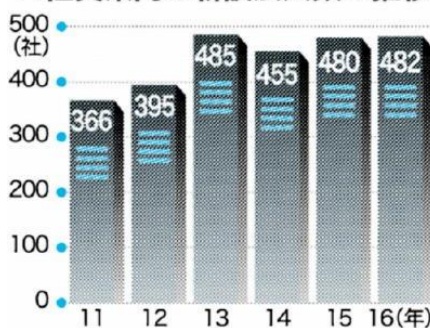
佐賀新聞 2017年06月15日

2016年に佐賀県内で新たに設立された法人数は前年比0.4%増の482社で、2年連続のプラスとなった。前年22社だった一般社団法人が、医療福祉分野を中心に37社と急増。過去5年でみると、太陽光発電事業者の設立が相次いだ2013年の485社に次いで多かった。全体の法人数に占める新設の割合は4.3%で、全国14番目となっている。

信用調査会社の東京商工リサーチ佐賀支店が、企業データベースの中から16年に設立された会社などの法人を抽出してまとめた。

業種別で最も多かったのが建設の72社で、前年比10社増。医療福祉56社（11社増）、小売51社（8社増）、不動産47社（12社増）と続いた。農林漁業・鉱業は前年

■佐賀県内の新設法人数の推移





より17社少ない21社、金融・保険は7社減の5社だった。

法人格別では、一般社団法人が前年比で約1.7倍に伸びた。合同会社は10%増、株式会社は前年並みだった。農事組合法人、特定非営利活動法人は前年から半減した。

東京商工リサーチ佐賀支店は「老人ホームの開設増などが一般社団法人の数字を押し上げた」と分析。農事組合法人の減少については「農地集積の受け皿としての設立が一段落した」とし、金融・保険の減少に関しては、日銀のマイナス金利政策による経営環境の悪化を要因に挙げている。

資本金別でみると、500万円未満が全体の6割を占めた。5千万円以上は1件、1億円以上はゼロで、06年の最低資本金制度の撤廃を受けて小規模化が進んでいる。市郡別では佐賀市(37%)と唐津市(12%)でほぼ半数を占める一方、他の市町は1桁台で地域間格差が広がっている。

今後の動向について、同佐賀支店は20年の東京五輪を控え、建設業は底堅く推移すると予測する。ただ、少子化や個人消費の伸び悩みを背景に全体的には鈍化する可能性もあるとし、「法人の新設には地域経済の底上げが欠かせない」と指摘している。

#### 高齢者6人に1人虐待被害 WHO、28カ国・地域調査 共同通信 2017年6月15日

【ジュネーブ共同】世界保健機関(WHO)は14日、世界28カ国・地域の調査で60歳以上の高齢者の6人に1人が何らかの虐待被害を経験しているとの研究結果を発表した。精神的な虐待が深刻と訴え、各国に介護従事者の研修や、電話相談などの対策強化を求めた。WHOは「高齢者への虐待は世界的に増加している」と指摘。この状況が続けば、高齢者が20億人に達する2050年には3億2千万人が虐待被害者になるとした。

WHOによると、研究は米国、ドイツ、中国、インド、韓国など世界28カ国・地域で行われた調査を基にした。

#### 「蛍火の明滅滅の深かりき」...

福井新聞 2017年6月15日

【越山若水】「蛍火の明滅滅の深かりき 細見綾子」。近くの川べりにホテルが飛び交っている。夜の闇をほの明るく照らす幾筋もの光が、見る者を幻想的な世界へといざなう▼時にはオス同士の発光が同調する集団明滅現象も見られる。マレーシアには大量のホテルが群がり、クリスマスツリーのように光る観光スポットがあるらしい▼福井県ゆかりの解剖学者養老孟司さんによると、物理的な共鳴に「ホイヘンスの振り子時計」がある。同じ種類の時計をつるしておくとかやがて同じ周期で動きだす▼しかし動物の場合は自分中心で、相手に合わせることはほとんどない。ホテルの同時点滅やスズムシの共鳴などは例外的なケースという。ただ人間の世界では、同調や共鳴が起きることも珍しくない▼人は4歳ぐらいになると、自分を相手の立場に置いて考え、他人に合わせることを意識的に行えるようになる。その理由は「自分と相手はイコール」との心理が働くからだ▼人間が持つ優しさや思いやりはここから生まれるのだろう。ところが世の中を見渡すと、学校でのいじめ、家庭での虐待は一向に減少する気配がない▼過去最多となった児童虐待に対応し、国会で改正児童福祉法が成立した。保護者への指導に実効性を持たせる内容という。ホテルの明滅を見て思う。人として、親として「同調する心」を取り戻してほしい...と。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

